

旧東海道「品川宿」を歩く(続)

長谷川 修

(承前)

品川は、「宿場町」、「漁師町」に加え「寺町」でもあった。高架を走る京急電鉄の北品川・立会川間の電車の窓からは、点在する多くのお寺の屋根が見える。港側には鎌倉時代からの古いお寺があり、山側には徳川家光が沢庵和尚を招聘して建てた東海寺があった。江戸期の東海寺は五万坪の敷地に十七の末寺を持っていたが、その面影は今も高層ビルの谷間にわずかに残っている。

宿場に飯盛女は付きものだ。江戸幕府の遊女政策は、「吉原」の女郎のみを公娼とし、それ以外の岡場所で商う私娼は、取り締まりの対象だった。この中間にあるのが宿場の飯盛女で、人数に制限はあるものの準公娼だった。五街道の一番宿である江戸四宿(品川、板橋、千住、内藤新宿)には大勢の飯盛女があり、最盛期の品川宿では、飯盛旅籠が九五軒、飯盛女が一三五〇人との記録がある。

江戸の川柳に「品川の客 になべんのあるとなし」と詠まれた。になべんのあるとは「侍」、なしとは「寺」のことだ。また戯文に「(品川では)坊主が五分、武家方が三分、町人が二分」とある。数字はともかく、僧侶と武士が品川遊里の上客だったことに間違いはない。

僧侶は、この近辺に大きいお寺(芝の増上寺、品川の東海寺、池上の本門寺)があったことによる。これら巨刹には末寺を含め大勢の住職や修行僧が住んでいた。戒律により妻帯を禁じられた僧侶は、品川遊郭で最大の顧客層を形成した。

武士については、現在の港区、品川区、目黒区辺りには、藩邸の中屋敷や下屋敷が多く置かれていた(特に薩摩、長門、土佐、肥後等の外様雄藩が多い)。参勤交代で国元を離れ江戸に単身赴任の「勤番武士」は、ヒマが多く足繁く品川へ通った。

品川のお寺を巡って、筆者が最も衝撃を受けたのは海蔵寺だ。三ノ輪の浄閑寺は「投げ込み寺」として有名だが、海蔵寺の墓地も、品川の娼妓が狭いところに大勢葬られており、死亡年齢も平均二十歳前後と知らされると胸に迫るものがある。